

『林巨正』 執筆第二期に見られる、ゆれ、について

波田野 節子

【要旨】 洪命憲の歴史小説『林巨正』は一九二八年から一九四〇年まで中断を繰り返しながら新聞と雑誌に連載された。筆者はその連載期間をつぎの三期に分けた。一九二八年から翌年の逮捕収監までの第一期、一九三二年の連載再開から三年後の病気による中断までの第二期、そして一九三七年の再開から一九四〇年後の完全中断までの第三期である。

洪命憲は第二期の『義兄弟編』を執筆している途中、その当時復刻された朝鮮の正史『朝鮮王朝実録』と出会ったが、とりあえずそのまま書き続けて、『火賊編』以降でこの正史を小説の材源として取り入れ、連載が完全に終わって『林巨正』を単行本にするときに、前に書いた『義兄弟編』を後で書いた『火賊編』の内容に合わせ、修正したと推測される。

筆者は第二期の記述に見られる時間の食い違いに疑問をいだき、原因を突きとめるためにこの時期の新聞連載と単行本のテキストを対校した。残念ながら原因を説明することはできなかったが、代わりに、単行本では消されて連載本テキストにだけ残された、作家の試行錯誤や推敲の跡を見出すことができた。本稿ではまた、『火賊編』冒頭の歴史的記述が、単行本にするさいに挿入されたものであることも明らかにした。この挿入は第三期における作家の創作姿勢を示唆するように思われる。

目 次

- はじめに
- 一 本稿に至る経緯
 - 二 執筆第二期の連載状況
 - 三 結義はなぜ一五五八年なのか
 - 四 数字へのこだわり
 - 五 伝奇的な要素に関わる修正
- はじめに
- 六 各章の独立性のための修正
 - 七 考証の結果と思われる修正
 - 八 登場人物に関わる修正
 - 九 「朝鮮王朝実録」に関わる修正
 - 十 その他
- おわりに

本稿では、洪命憲の小説『林巨正』の第二期新聞連載テキストと単行本テキストを対照して気づいたいくつかの点を報告する。手持ちのマイクロフィルムコピーの鮮明度に問題が多く、また筆者の力量不足や時間の制約もあって、取りこぼしも多々あったであろうことをお断りしておく。

一 本稿に至る経緯

『林巨正』は、一九二八年から十二年間にわたり、中断を繰り返しながら新聞と雑誌に連載されて未完に終わった歴史小説である。⁽¹⁾ 作者洪命憲（一八八八～一九六八）はこの小説を解放前と解放後のソウルで単行本として刊行したが、予告されていた前半の三編と完結編は、この時刊行されなかった。⁽²⁾ 洪命憲はその後北朝鮮に渡り、

朝鮮戦争後のピョンヤンでふたたび刊行するが、その時は前半部が最初から抜かれていて、最後まで未完のままであった。⁽³⁾ その後ずっと絶版になっていたこの小説は、一九八〇年代半ばになると南北ではほぼ同時期に刊行される。⁽⁴⁾ ただし、韓国の四季節社では、単行本にならなかった前半部を当時の新聞から版を起こして最初の三編として組み込み、北朝鮮の国立出版社は前半部は抜いたままで、直系の孫である作家洪錫中の手によって内容を改作した。要するに、南北どちらにおいても、作者の存命中とは違った形態で刊行されたのである。

韓国で刊行された『林巨正』を読んだ筆者は、作品中に見られる不連続性と未完性に疑問をいだき、論文『林巨正』の「不連続性」と「未完性」について⁽⁵⁾ を書いて、その原因を追究した。この論文で筆者は十二年にわたる新聞連載時期を三期に分けて、不連続が第一期と第二期の間で生じていることを指摘し、一九二〇年代末に政治犯として収監され一九三二年に出獄した作者が、社会情勢の変化に直面して創作方針を転換したことが不連続を引き起こしたと述べた。また、作者が第二期の途中で正史『朝鮮王朝実録』（以下「実録」と記す）と出会って材源とするようになったことが、この小説が未完に終わった原因の一つであると推論した。

推論の手がかりとなったのは、『朝鮮日報』に掲載されたテキストと単行本のテキストの違いだった。第二期に連載されたのは『義兄弟編』全章と『火賊編』の最初の章「青石洞」である。『義兄弟編』最後の「結義」の章に、義兄弟たちが一人ひとり出生年と年齢を言って義兄弟の誓いを行なう場面があるのだが、単行本では連載時に比べて年齢が二歳ずつ引き下げられており、五年間だった「義兄弟編」の作品内時間が三年間に短縮されていたのである。連載時に一五六〇年であった結義の年を一五五八年に繰り上げたのは、『朝鮮王朝実録』に載っている一五六〇年の巨正関連事件を作品に取り入れるためであろうと筆者は推論した。

しかしながら論文を書いたあと、筆者にはいくつかの疑問が残った。まず、単行本にするさいに作者があらたに盛り込んだ「李億根殺害事件」の年代であるが、一五五九年の「実録」にあるこの事件を、洪命憲は結義の年、

『林巨正』執筆第二期に見られる、ゆれ、について（波田野）

つまり一五五八年におきた事件として挿入している。⁽⁶⁾次に、小説で重要な役割を果たしている実在の人物李潤慶・李浚慶兄弟について、作者は時間短縮にもなる官職の変化を逐一変更する気配りを見せているにもかかわらず、潤慶が咸鏡道監司、浚慶が右議政になった年を史実と一年違わせている。第三に、「結義」が一五五八年なら翌年は一五五九年でなくてはならないのに、あらたに靑石洞に入党した金山の年齢と出生年によって、この年を作者はわざわざ一五六〇年にしている。また小さいことだが、義兄弟のうち吉マッポインだけ年齢を一歳しか引き下げていないことも気になった。

もちろん歴史小説はあくまでもフィクションである。作者には自由な裁量の権利があるし、資料を読み違えることもあるだろう。だが作品を通して洪命憲の史実に対する執拗なこだわりを感じていた筆者には、こうした小さな点が単なるミスであるように思われなかった。なによりも、単行本刊行のための準備期間は、「実録」を素材として「平山戦」の章を執筆した時期と重なっている。「平山戦」において時間と空間をあれほど緻密に計算した作者は、同じような細心さをもって前の部分を修正したはずであると、筆者には思われた。

そこで、このような食い違いに何か意味があるのかを見きわめるために、第二期に連載された『義兄弟編』全章と『火賊編』の「靑石洞」の章を対象として、テキストの異同を調査してみた。結論から言うと、年齢と年代に関する疑問は残念ながら解決することができなかった。しかしテキストの異同調査を通して、洪命憲がこの時期に見せている創作の、ゆれ、のようなものを感じることができた。本稿では、それを報告する。

二 執筆第二期の連載状況

洪命憲にとって、第二期は創作上非常に難しい時期であったと想像される。第二期連載の開始にあたって、彼は朝鮮情調を描くという創作方針を再確認し、第一期とは異なる人格の主人公を創造していった。この変更が読

者に不連続感を与えないようにするだけでも大変な作業であったはずなのに、この時期に『朝鮮王朝実録』に出会い、圧倒的な史実に影響されながらもそれまでの内容との整合性を保ちつつ、同時に、『実録』を材源とするあらたな構想を練りながら、それに合わせて連載中の小説の時間まで変えるという、まさに綱渡りのような創作活動を行なったのである。⁽⁷⁾単行本にするさいに作者自身の手によって拭い去られ、連載本テキストだけに残っている苦勞の痕跡、それが筆者の言う、ゆれ、である。

『義兄弟編』の連載を始めて三カ月ほどたったころ『朝鮮日報』が停刊になり、『林巨正』も一カ月以上休載した。「郭オジュ」の章を書いているときのことである。新聞が再刊されて連載も再開したときに新聞社の依頼で書いた「今日までの梗概」⁽⁸⁾のなかで、洪命憲はこれまでの連載状況がきわめて変則的であったことを軽妙な筆致で回想している。

まず「最初の一年は病氣ばかりで」とあるのは、新幹会活動に奔走しながら新聞連載をしていた第一期のことである。「次の約三年は不生不滅」は光州事件関連で獄中生活を送った時期。政治活動をしていた時期と獄中にいた二つの時期をこんなふうに暗喩したわけである。次の「この前は予告ばかり」というのは、出獄して連載再開の予告が出た直後に朝鮮日報社の内紛がおこって再開が遅れたことを指す。予告から半年遅れて『義兄弟編』は一九三二年十二月に始まったが、年を越して三月に今度は新聞停刊のために休載した。「このたびは中途半場であやむや」というのは、今回の休載を指している。

しかしながら、出獄後の作者が政治活動を封じられたために、「今日までの梗概」を書いたあとの連載状況はむしろ順調であった。執筆第二期の連載状況を表にしたのが〈表一〉である。連載日数と連載回数で見ると、この年の終わるころまで連載ペースは順調で、「李鳳学」のあたりからペースが落ちはじめ。そして「徐霖」の章では途中で病氣休載し、『火賊編』に入ると四六五日間で一回一回というローペースになっている。病氣のほ

【林巨正】執筆第二期に見られる、ゆれ、について(波田野)

〈表1〉第2期連載状況

	タイトル	連載期間	日数	回数	備考
義1	朴ユボギ	1932年12月1日 1933年2月4日	75日	60回	11月30日に再開予告記事 挿絵、安碩柱
	郭オジュ	2月14日 6月10日	117日	53回	3/3~4/25停刊のため休載 4月26日「今日까지의梗概」 途中で舞児の挿絵に交代
義2	吉マッポニ	6月13日 7月29日	47日	40回	挿絵、具本雄
	黄天王童	8月1日 9月10日	41日	29回	途中で熊超の挿絵に交代 途中1週間の休載
	裴トルソギ	9月15日 11月14日	61日	44回	途中で安碩柱の挿絵に交代
	李鳳学	11月18日 1934年2月1日	76日	44回	
義3	徐霖	2月4日 5月17日	104日	66回	4/20~5/1 病気で休載 5月2日「7頭に「編集者」の言葉
	結義	5月19日 9月4日	109日	69回	
火1	青石洞	9月15日 1935年12月24日	465日	141回	2/10~7/22, 8/1~9/26休載 7月23日「전회까지의梗概」

かに、先に述べたような創作上の困難が重なったことも執筆ペースに影響を与え、ペースが低下したものと推測される。この時期の作者には、政治活動の忙しさや収監という外部の要因によるものとは違う種類の苦労があったのである。

【火賊編】の初章「青石洞」を終えた一九三五年十二月に「林巨正」はまた中断した。その二年後に始まった第三期の新聞連載が一九三九年七月にいたってストップすると、朝鮮日報社では「林巨正」単行本の刊行に入った。十月の「義兄弟篇(1)」、十一月の「義兄弟篇(2)」、十二月の「火賊篇(上)」、翌年二月の「火賊篇(中)」まで刊行は順調であったが、そのあとに予告されていた【火賊篇(下)】と前半三編【鳳丹篇】「皮匠篇」【両班篇】は予告のみで実際には出なかった。刊行された単行本は全部で四冊、うち「義兄弟篇」二冊と「火賊篇(上)」の初章「青石洞」が第二期に連載された部分である。時間的に見て、洪命憲が第三期執筆中にこれらの修正作業に着手していた可能性は高いと思われる。その過程で作者の手によって拭い去られた、連載本テ

キストだけに残された「ゆれ」を、次章以下でたどることにする。

三 結義はなぜ二五五八年なのか

【林巨正】連載本における登場人物たちの年齢を表にしたのが(表2)である。結義のときの年齢と齟齬をきたしている場合にXをつけてある。まずオジュの年齢が一歳違う。つぎにマッポニの年齢が二十三、四歳と二十一歳で、ともに三年後の結義のときの年齢と計算が合わない。また裴トルソギの年齢が三十四歳と三十六歳とになっているが、結義時の年齢から計算すると前者が正しい。だがその他の人物は整合しており、作者が新聞連載時において、登場人物の年齢にはそれなりに気を配っていたことが窺われる。

注目すべきことは、連載当時、「結義」の章で結義を二五五八年に設定しておきながら、そのあとの「青石洞」の章で、あらたに登場した金山の年齢と出生年によって、翌年をもう一度二五五八年にしていることだ。洪命憲は、一五六〇年の【実録】にある林巨正関連事件を小説に取り込むために、連載の途中で時間を一年後ろに倒して時間変更を行なったのである。この結果、読者にとっては一五六〇年が二回続いたことになるが、おそらく当時これに気づいた読者はいなかったことだろう。

単行本で洪命憲は、登場人物の年齢を引き下げて結義の年を二五五八年から一五五八年に変え、それに合わせてあちこちで各人物の年齢を修正した。それを表にしたのが(表3)である。マッポニの出生年を戊戌から乙酉にしたのは、「吉マッポニ」の章にある「いまは二十歳を越えているから」という言葉を生かしてこの時点での年齢を二十一歳にするためであろう。オジュとトルソギの年齢の誤りも修正されている。結義直前に死んだ瓶亥大師の年齢が一歳しか下げられていないが、これは「朴ユボギ」の章で調整してある。要するに洪命憲は結義年に合わせて完璧な年齢調整を行なったのである。

〈表3〉「林巨正」単行本での年齢構成

	巨正	ユボギ	オジュ	マッボンイ	天王童	トルソク	鳳学	大師
1555(乙卯)	[倭交出征] 34歳 ¹⁾ 仇討ち結婚 靑石洞へ				31歳 ²⁾	[倭交出征]	[倭交出征] 全州で李泗慶の裨将となる	82歳 ⁴⁾
1556(丙辰)		24歳 ²⁾ ボッサム結婚				35歳 ⁵⁾ 婢夫になる		
1557(丁巳)		赤子殺し 靑石洞へ	21歳 ⁶⁾		33歳 ⁷⁾	虎退治 靑石洞へ	旌義県監に兼大静県監に	84歳 ⁹⁾
	天王童に同行して 济州島へ		婿入り 靑石洞へ		婿選び結婚	五衛部将に ソウルへ 臨津別将に		
1558(戊午) 春	[進上物強奪]	[進上物強奪]	[進上物強奪]	[進上物強奪]	[進上物強奪]	[進上物強奪]		
	[楊州破獄] 靑石洞へ 李億根事件×	[楊州破獄]	[楊州破獄]	[楊州破獄]	[楊州破獄] 靑石洞へ	[楊州破獄]		
夏	[安城破獄] [結義] 辛巳生 38歳 ⁹⁾	[安城破獄] [結義] 壬午生 37歳	[安城破獄] [結義] 壬辰生 22歳	[安城破獄] [結義] 丁酉生 22歳	[安城破獄] [結義] 乙酉生 34歳	[安城破獄] [結義] 壬午生 37歳	[安城破獄] [結義] 辛巳生 38歳	死亡 85歳 ¹⁰⁾
現在 1558年←								
火賊編 1	秋 巨正が靑石洞の首領になる 官軍の来襲のため靑石洞から廣福山へと移る 冬 巨正がソウルに遊びに行く 翌春 巨正がソウルで3人の妻を持つ 巨正がもどり、一党が靑石洞へと移る 命山が靑石洞に来る 丙戌生35歳 ¹¹⁾							
2	1560(庚申) 5月	10歳になった王世子の冠礼元服と世子嬪揀択を前に、文定王后が端午の節句に松岳山で神事を行なうことを命じて尚宮を送る						

1) 『林巨正4』 p. 25
 2) 『林巨正4』 p. 198
 3) 『林巨正4』 p. 25
 4) 『林巨正4』 p. 16
 5) 『林巨正5』 p. 228
 6) 『林巨正5』 p. 19 および p. 92
 7) 『林巨正5』 p. 152
 8) 『林巨正5』 p. 384
 9) 『林巨正6』 p. 285-6
 10) 『林巨正6』 p. 97
 11) 『林巨正7』 p. 344

〈表2〉「林巨正」新聞連載本での年齢構成

	巨正	ユボギ	オジュ	マッボンイ	天王童	トルソク	鳳学	大師
1555(乙卯)	[倭交出征] 34歳 ¹⁾ 仇討ち結婚 靑石洞へ				31歳 ²⁾	[倭交出征]	[倭交出征] 全州で李泗慶の裨将になる	81歳 ⁴⁾
1556(丙辰)		25歳 ²⁾ × ボッサム結婚						
1557(丁巳)		赤子殺し 靑石洞へ	23, 4歳 ⁵⁾ × 21歳 ⁶⁾ × 婿入り 靑石洞へ		36歳 ⁷⁾ 34歳 ⁸⁾ × 婿入り 婢夫になる	虎退治 靑石洞へ	旌義県監に兼大静県監に	84歳 ¹⁰⁾
1558(戊午)	天王童に同行して 济州島へ				婿選び結婚 济州道配流	五衛部将に ソウルへ 臨津別将に		
1559(己未) 12月		[進上物強奪]	[進上物強奪]	[進上物強奪]	[進上物強奪]	[進上物強奪]		
1560(庚申) 春	[楊州破獄] 靑石洞へ	[楊州破獄]	[楊州破獄]	[楊州破獄]	3月、戻る [楊州破獄] 靑石洞へ	[楊州破獄]		
夏	[安城破獄] [結義] 辛巳生 40歳 ¹¹⁾	[安城破獄] [結義] 壬午生 39歳	[安城破獄] [結義] 壬辰生 29歳	[安城破獄] [結義] 戊戌生 23歳	[安城破獄] [結義] 乙酉生 36歳	[安城破獄] [結義] 壬午生 39歳	[安城破獄] [結義] 辛巳生 40歳	死亡 86歳 ¹²⁾
現在 1560年←								
火賊編 1	秋 巨正が靑石洞の首領になる 官軍の来襲のため靑石洞から廣福山へと移る 冬 巨正がソウルに遊びに行く 翌春 巨正がソウルで3人の妻を持つ 巨正がもどり、一党が靑石洞へと移る 命山が靑石洞に来る 丙戌生35歳 ¹³⁾							
2	1560(庚申) 5月	10歳になった王世子の冠礼元服と世子嬪揀択を前に、文定王后が端午の節句に松岳山で神事を行なうことを命じて尚宮を送る						

1) 朴1-7: 朴ユボギが黄天王童に年齢を尋ねて31歳と聞き、自分より3歳年下だと云っている。
 2) 郭1-11: 郭オジュがユボギに25歳だと名乗る。ユボギは34歳で9歳年上。単行本では24歳に変更され、年齢差も10歳に変更。
 3) 註1)に同じ。
 4) 朴1-4: エギオンマが義父の消息をユボギに伝えて言う。単行本では82歳に変更。
 5) 吉1-6: 年はわずが23, 4歳と説明されている。単行本では21歳に変更。
 6) 吉2-15: マッボンイがともに一夜を過ごした娘の親に言う。
 7) 裴1-15 (15が2回ある後のほう): トルソギが婢夫になるよう勧める両班夫人に答えて言う。単行本では35歳に変更。
 8) 裴1-18: 婢夫として入った家の主人両班と同年で34歳とある。単行本では35歳に変更。
 9) 貴1-16: 天王童が婿選びの試験を行なう白吏房の問いに答えて言う。単行本では34歳に変更。
 10) 李3-6: 济州島に李鳳学を訪ねた巨正の言葉。
 11) 結3-20: 結義の場面で義兄弟全員が出生年と年齢を述べる。単行本ではマッボンイ以外2歳年下に変更。
 12) 徐2-23: 取り調べられたエギオンマが郡守の問いに答えて言う。単行本では85歳に変更。なお徐霖2-23は実際には3-8に該当するが、単行本では3節以降は結義の章に入れられている。
 13) 青6-14: 命山が黄天王童に聞かれて言う。単行本でも同じ。

「林巨正」執筆第二期に見られる、ゆれ、について(波田野)

こうして作者は作品内時間を五年間から三年間に短縮し、登場人物の年齢と官職のほか、周辺すべてに手を加えた。「実録」に名前の出ている高官たちと接触があった李鳳学についてはそれが顕著であるが、そのほかにも、たとえば楊州破獄事件のあとで取り調べられた黄天童の舅の陳述が、「あれが釈放されて二年ぶりに今月の中ごろ訪ねてきて」から「あれが今月釈放されて」に変わっているなど、天童が済州島で過ごした期間の短縮にも苦労した形跡があちこちに残されている。また、徐霖がはじめて青石洞を訪れたとき、新聞連載では、すでに青石洞に武器庫や数百石の軍糧が積まれた軍糧庫があり、馬小屋にも軍馬が十匹以上いるなど、ある程度の時間の経過を感じさせるが、単行本になると家はまだ新築で、その年の春から夏と秋にかけてずっと新築工事が続いていることになっている。一五五七年から一五五九年までの三年間を一五五七年一年間に短縮するために、作者は時間に関わる記述をあらゆる場所で修正し、その結果、すでに指摘したように作品からは季節感が失われてしまった。

ところが不思議なことに、結義の年を一五五八年にする必然性はないのである。先述したように、連載の途中で洪命憲は、結義の翌年を一五六〇年にする必要を感じ、金山という人物の年齢と出生年の設定によって、作品内の時間を一五六一年から一年引き戻した。そして表で見るとおり、その部分には単行本でも手をつけていない。それならば、結義の年はむしろ一五五九年こそがふさわしいことになる。

そこで、こころみに結義の年を一五五九年にして義兄弟たちの年齢を一歳ふやしてみたのが、(表4)である。短縮時間が二年から一年に減ったので無理が少なくなっているし、なによりも、こうすれば「実録」に記載された「李億根事件」の時期とも一致する。なぜ洪命憲が結義の年を一五五九年にしないで一五五八年にしたのか、不思議に思わざるをえない。

官職についても同じことが言える。単行本での官職と「実録」による官職を一覧にしたのが(表5)である。

〈表4〉「林巨正」単行本での年齢構成(仮定)

	巨正	ユボギ	オジュ	マッポンイ	天王童	トルソク	鳳学	大師	
義兄弟編	1555(乙卯)	[倭寇出征] 34歳 仇討ち結婚 青石洞へ			31歳	[倭寇出征]	[倭寇出征] 全州で李潤慶の裨将となる	82歳	
	1556(丙辰)		24歳 ポッサム結婚			35歳 婢夫になる			
	1557(丁巳)		赤子殺し 青石洞へ	21歳 婿入り 青石洞へ	33歳 婿遊び結婚	虎退治 青石洞へ	旌義果監に兼大静果監に 五衛部将に		
	1558(戊午)	天王童に同行して済州島へ			済州島配流		ソウルに 臨津別将に		
	1559(己未)春	[楊州破獄] 青石洞へ 李億根事件○	[楊州破獄]	[楊州破獄]	[楊州破獄]	[楊州破獄] 配流から戻る 青石洞へ	[楊州破獄]	死亡 86歳	
現在 1559年←	夏 [安城破獄] [結義] 辛巳生 39歳	[安城破獄] [結義] 壬午生 38歳	[安城破獄] [結義] 壬辰生 28歳	[安城破獄] [結義] 丁酉生 23歳	[安城破獄] [結義] 乙酉生 35歳	[安城破獄] [結義] 壬午生 38歳	[安城破獄] [結義] 辛巳生 39歳		
火賊編	秋	巨正が青石洞の首領になる 官軍の来襲のため青石洞から廣福山へと移る							
	冬	巨正がソウルに遊びに行く							
1	1560(庚申)春	巨正がソウルで3人の妻を持つ 巨正がもどり、一党が青石洞へと移る							
	現在 1560年←	金山が青石洞に来る 丙戌生35歳							
2	1560(庚申)5月	10歳になった王世子の冠礼元服と世子嬪揀択を前に、文定王后が端午の節句に松岳山で神事を行なうことを命じて尚宮を送る							

「林巨正」執筆第二期に見られる「ゆれ」について(波田野)

鯁鯁をきたしている場合に×をつけてある。単行本にするさいに洪命憲は、連載のときに犯した官職の誤りを訂正し、時間短縮によって生じた官職の変更を修正した。⁽¹⁵⁾にもかかわらず、李潤慶と李浚慶の官職の時期が史実と違っていることが疑問であった。

これを年齢の場合と同様、結義の年を一五五九年におきかえてみたのが、(表6)である。李潤慶が咸鏡道監司になるのと李浚慶が右議政になる順番が違うだけで年代には問題がなくなり、巨正の妻にされた元氏の父親の官職まで符合する。⁽¹⁶⁾

これらの表を前にして、筆者は考えこんでしまった。洪命憲は結義の年を一五五八年にすることで、むしろ史実との整合性を失わせているように見える。もちろん作者が勘違いしていたという可能性は排除できない。洪命憲はある所で、自分はまともなノート一冊作らないと自嘲的に述懐している。だが、彼の記憶力が人並みはずれていたことは多くの人が語っているし、ノートこそ作らなかったが、彼は紙切れにゴマ粒のような字を書いて備忘録としていたという話が残されている。⁽¹⁸⁾なによりも結義の年を一年遅くして一五五九年にすることで奇妙なまでに整合性が回復するのは、単なる偶然のように思われない。もしこれが偶然でないとするなら、洪命憲にはいったいどういう意図があったのか。虚構の人々の存在を史実とは別の次元に置いておきたかったのか。あまりに作物的に見えるのを嫌ったのか。それとも単なる数字の遊びだったのか。いろいろな理由を考えてみたが、結局のところ筆者には判断がつかなかった。残念ながら、今後の課題として残すほかはない。

四 数字へのこだわり

数字の遊びというのは語弊があるかもしれない。だが洪命憲には数字に異常にこだわる癖があったことは確かである。異同を調査しながら驚いたのは、数字の修正があまりにも多いことであった。もちろん根拠のある数字

〈表5〉事件と官職の対照表 (単行本)

	作品内の事件	朝鮮王朝実録
義兄弟編 1 2 3 1558(戊午)春 夏 現在 1558年- 秋 翌春 現在 1560年- 2 3 4	1555(乙卯) 巨正と鳳学が出征 ユボギが仇を討ち、 <u>靑石洞</u> へ 鳳学が全州監司李潤慶の裨将になる ○	5月 乙卯倭交 8月 李潤慶が全州監司になる(8.2) 11月 李浚慶が議政府右贊成兼兵曹判書になる(11.22)
	1556(丙辰) 李浚慶は議政府右贊成兼兵曹判書である ¹⁾ ○ 鳳学が造義果監になる 李潤慶が京畿監司になる ○	8月 李潤慶が京畿監司になる(8.6)
	1557(丁巳) オジュが赤子を殺し、 <u>靑石洞</u> へ 鳳学が大静果監を兼ねる 李潤慶が漢城府右尹になる ○ マッボンイ、 <u>靑石洞</u> へ 天王童が濟州島に配流される トルソギ、 <u>靑石洞</u> へ 鳳学が漢城へ 李浚慶が政丞になる ²⁾ × 李潤慶が咸鏡監司になる × 徐霖、平壤監司金明胤に仕える ³⁾ <u>靑石洞</u> へ [進上物強奪]	9月 李潤慶が漢城府右尹になる(9.13)
	1558(戊午)春 天王童が濟州島から戻る [楊州破獄] 巨正と天王童、 <u>靑石洞</u> へ 李億根が殺害される ⁴⁾ × 天王童が黄海監司慎希復の甥を詐称 ⁵⁾ × 鳳学、 <u>靑石洞</u> へ [安城破獄] [結義]巨正38歳	8月 李潤慶が咸鏡監司になる(8.5) 11月 李浚慶が政丞になる(11.23)
	現在 1558年- 秋 巨正が靑石洞の首領になる 翌春 巨正が刑曹判書元繼俊の娘を妻にする× 巨正が靑石洞にもどる 金山が靑石洞に来る(丙戌生35歳)	3月 黄海監司慎希復弾劾記事(3.25) 李億根事件記事(3.27/4.21) 4月 元繼俊が刑曹判書になる(4.3~1560-5)
	2 1560(庚申) 王世子10歳 元服 世子孿揀択 ○ 松岳山端午クツ事件	順懷世子(1551~1565)元服、世子孿揀択
	3 秋 11月 盜右大将南致勳、左大将李夢麟 ○ 平山戦 ○	8月 捕盜右大将南致勳、左大将李夢麟 ⁶⁾ (8.20) 11月 平山戦
	4 12月 巡警使が出る ○ 巨正ら慈母山城へ	12月 巡警使が出る

1) 李1-13 (1933年12月28日) では議政府右贊成だけであったのを単行本で修正した。(『林巨正5』p. 365)
 2) 李3-13 (1934年1月28日) では判書であったのを単行本で修正した。(『林巨正5』p. 401)
 3) 新聞連載時には李標だったのを単行本で修正し、同時に沈連源の一周忌の年(1559)だったのを曖昧化した。(『林巨正6』)
 4) 徐4-1 (新聞では3-22と誤記。1934年5月2日) にはなかったのを単行本で挿入した。17頁に編纂者の言があり、前回からこの回まで作者の病気のために12日休載していたことがわかる。(『林巨正6』p. 133, 4. なお単行本では徐霖の軍ではなく結義の軍)
 5) 徐4-6 (1934年5月8日) では平山屬毎川慎贊成になっているのを単行本で修正。(『林巨正6』p. 147)
 6) 南致勳が捕盜右大将になったのがいつかは不明。李夢麟がこの肩書きで『実録』に出ていた一番古い記事は1557年4月1日。なお小説ではこの二人は巨正が尹元衛の側人を殺したときの捕盜大将である。(靑4-9/『林巨正7』p. 145)

【林巨正】執筆第二期に見られる、ゆれ、について(波田野)

〈表6〉事件と官職の対照表 (仮定)

	作品内の事件	朝鮮王朝実録
義 兄 弟 編 1 2 3	1555(乙卯) 巨正と鳳学が出征 ユボギが仇を討ち、 <u>靑石洞</u> へ 鳳学が全州監司李潤慶の裨将になる ○	5月 乙卯倭変 8月 李潤慶が全州監司になる(8.2) 11月 李潤慶が議政府右贊成兼兵曹判書になる(11.22)
	1556(丙辰) 李潤慶は議政府右贊成兼兵曹判書である ○ 鳳学が旌義縣監司になる 李潤慶が京畿監司になる ○	8月 李潤慶が京畿監司になる(8.6)
	1557(丁巳) 鳳学が大静縣監を兼ねる 李潤慶が漢城府右尹になる ○ マッボンイ、 <u>靑石洞</u> へ 天王童が濟州島に配流される トルソギ、 <u>靑石洞</u> へ	9月 李潤慶が漢城府右尹になる(9.13)
	1558(戊午) 鳳学が漢城へ 李潤慶が政丞になる △ 李潤慶が成鏡監司になる ○ 徐霖が平壤監司金明嵐に仕える 徐霖、 <u>靑石洞</u> へ [進上物強奪]	8月 李潤慶が成鏡監司になる(8.5) 11月 李潤慶が政丞になる(11.23)
	1559(己未) 春 天王童が濟州島から戻る [楊州破獄] 巨正と天王童、 <u>靑石洞</u> へ 李億根が殺害される ○ 天王童が黄海監司慎希復の甥を詐称 ○ 夏 鳳学、 <u>靑石洞</u> へ [安城破獄] [結讞]巨正39歳	3月 黄海監司慎希復弾劾記事(3.25) 李億根事件記事(3.27/4.21) 4月 元繼俊が刑曹判書になる(4.3~1560.5)
	現在 1559年← 秋 巨正が靑石洞の首領になる 翌春 巨正が刑曹判書元繼俊の娘を妻にする ○ 現在 巨正が靑石洞にもどる 1560年← 金山が靑石洞に来る(丙戌生35歳)	
	2 1560(庚申) 王世子10歳 元服 世子嬪揀択 松岳山端午クツ事件	順儀世子(1551~1565)元服、世子嬪揀択
	3 秋 盜石大將南致勳、左大將李夢麟 ○ 11月 平山戦 ○ 12月 巡警使が出る ○ 巨正ら慈母山城へ	8月 捕盜右大將南致勳、左大將李夢麟(8.20) 11月 平山戦 12月 巡警使が出る
	4	

太子の○△は〈表5〉で×だったもの

変更もあるが、一見してどうでもいい数字の場合に、かなりの確率で変更されているのである。たとえば、借力薬を飲んで不思議な力を得たユボギが一日に歩く距離が百四、五十里(十里〓日本の一里)だったのを百二、三十里に、四、五人力だったのを十人力にし、ソウル―七長寺間二百十里を歩く配分を一日目は七十里で二日目が百四十里だったところを、一日目が八十里で二日目は百三十里に変更するといった具合である。第二期のテキスト全体にわたって、この種の変更が加えられている。トルソギを襲撃する間男の金が、仲間七人を引き連れて総勢八人であろうが六人を引き連れて総勢七人であろうが、また安城で獄を破った火賊の追跡に向かった左右兵房の率いた兵士の数が七、八十人であろうが六、七十人であろうが、ましてその際に出た官軍の死傷者数が四、五十人であろうが三、四十人であろうが、小説の展開にはまったく影響がない。文章のリズムや引き締めとも関わっているように見えない。筆者には、こうした数字変更は作者の癖としか思われなかったのかもしれない。内時間の整合性に気を使うあまり、作者には、すべての数字に対して神経を尖らす癖ができたのかもしれない。前章で述べた年齢や年代の齟齬がただの間違いとは思われなかった理由の一つは、テキストの異同調査を通して、数字に対する洪命憲の異常なまでのこだわりを感じていたからである。

五 伝奇的な要素に関わる修正

これに比べて意図がはっきりしていると思われるのが、伝奇的な要素に関わる修正である。四季節社の校正者は「校正後記」に、「作家がどのような視角をもって推敲をしたのかを端的にあらわした箇所」として、単行本では削除されている「朴ユボギ」の章の幾つかの場面を挙げている。父の仇を討ったあと特積山の崔瑩將軍を祀った御堂に迷いこんだユボギが、ムーダンたちに將軍の嫁として捧げられた娘と結ばれ、その夜現われた虎を手裏剣で撃退する場面と、二人で山から逃げ出すときに行く手をふさいだ大蛇の頭を一刀のもとに切り落とす

【林巨正】執筆第二期に見られる「ゆれ」について(波田野)

場面、およびこれに付随する場面である。

校正者は、洪命憲がこの部分を削除したのは、荒唐無稽で怪奇な点を反省したためだろうと述べているが、その見解に筆者も同意する。削除された部分では、虎も蛇も「崔將軍の下人」と呼ばれている。「義兄弟編」を書きはじめた当初は伝奇的な要素を取り入れた洪命憲は、先に進むにつれてリアリズムの傾向を強めていったように見える。ユボギが巨正の家族に語る身の上話によれば、彼は大病を患って足が萎えたために長いこと立つことができなかったが、異人が飲ませてくれた借力薬のおかげで立てるようになったうえ、人並みはずれた早足と怪力の持ち主になったという。しかしながら、小説内で彼の特技として強調されるのはその不思議な力よりも、足腰が立たなかった長い歲月、朝から晩まで修行して習得した神技に近い手裏剣技である。彼には、十年以上の病苦と心労のせいで年齢よりもずっとふけた胃の持病に苦しむ中年男、という現実的なイメージが付与されている。単行本にするとき、洪命憲は全体のバランスを考えて、「義兄弟編」の最初に残っていた伝奇的な要素の強い場面を削除したのだろう。

「黄天王童」の章から縮地法のエピソードを削除したのも、これと同じ理由によると推測される。新聞連載當時、「黄天王童」の章の冒頭では黄天王童の特技である早足の不思議さが強調されていた。ある日、楊州の巨正の家に立ち寄った吉マッポニーから、タブコル村に将棋のうまい老人がいると聞いた天王童は、将棋の勝負をするためにマッポニーと同行することにする。タブコル村(靑石洞の近く)から楊州は百六、七十里で普通の人間が歩いて二日かかる距離だが、天王童は二日もかけるのは嫌だと言ってマッポニーを一日早く発たせ、自分は翌日発って同時に到着する。あまりの早足に驚いたマッポニーの口から、「縮地法をやるのか」という言葉が飛び出す。「縮地法って何だい」「鬼神が地面を縮める術さ」という二人のやり取りを含めて、単行本ではこのエピソードは削除されて、楊州を訪れるのはユボギの使いの孫哥になっている。用事を終えてタブコル村に帰った彼は、

前日に楊州で別れてきた天王童が自分の家に先に来ていたのを見て、「早足のことばかり耳にしていたが、アイグ！」と舌を巻くという、あつさりした表現になっている。⁽³¹⁾

このあと将棋好きの老人から鳳山に将棋の名人がいると聞いた天王童は、胃の具合が悪いユボギに鳳山の薬水を飲みにいこうと誘って仲間たちと出かけることになり、そのことを家族に告げるために、今度はたった一日で楊州まで往復してくる。⁽³²⁾ そのさいの驚異的な行程を削除して単に「一度帰ってくることにした」という表現にとどめたのは、天王童の特技の伝奇性をくりかえし強調することを避けたからであろう。

六 各章の独立性のための修正

ところで、作者が縮地法のエピソードを削除したのは、伝奇的な要素を取り除くほかに、この章からマッポニーの存在感を取り払うことも目的だったように見える。縮地法の話にとどまらず、作者はこの章からマッポニーの姿を完全に消し去っているからだ。連載当時、「黄天王童」の章の冒頭部分ではマッポニーの存在感が非常に強かった。晉州の兄のところに行った帰りに巨正の家に立ち寄ったマッポニーは、天王童と会うとさっそく、年上の未婚者と年下の既婚者のどちらが目上待遇を受けるべきかという、いつもの軽口の応酬を始める。タブコル村に着いてからも常に天王童のかたわらで冗談を言いつづけ、靑石洞で鳳山の薬水の話が出たときには、鳳山には娘たちが沢山いるぞというマッポニーの冗談が端緒となって、安城に残してきた彼の妻の話が始まる。⁽³³⁾

ところが単行本ではマッポニーの姿は消えている。巨正の家を訪ねてくるのは孫哥であり、既婚者と年上のどちらが目上待遇を受けるべきかの軽口はオジュとの会話に変わり、靑石洞でマッポニーの果たしていた剽軽な役割は呉哥が担っている。なぜ作者はここまで完璧にマッポニーを消したのか。

作者には、前章の影響を排除して「黄天王童」の章の独立性を高めたという意図があったのだと推測される。

前章で主人公として活躍したマッポニーが次の章でも存在感をもつて登場し、妻の後日談まで語っている。「黄天王童」が前の章の続きとして読まれる恐れがある。それを危惧した作家が、前の章との関連を断ち切るためにマッポニーを消したと思われるのだ。

洪命憲は「林巨正」執筆当初から、各章に独立性をもたせて別々の物語としても読めるようにするという方針を立てていた。第二期の連載が三年ぶりにはじまるときも、「もともと編ごとに切りはなせるよう腹案を立ててありますから、前の部分を読んでいない読者でも事件の脈絡に混乱をきたすことはないと思います⁽³⁵⁾」として、予告記事に詳しいあらすじは書かなかつたほどである。解放後のある座談会で、彼はこの創作形式の発想をロシア作家クープリンの作品から得たことを明かし、「長編小説でありながら、ばらばらにすれば全部が短編小説⁽³⁶⁾」と語った。だから短編小説でありながら、長編小説としても面白い。そこから「林巨正」のヒントを得た⁽³⁶⁾と語っている。最初に立てられたこの方針は「義兄弟編」でも堅持され、むしろ先に行くほど各章の独立性は強ま⁽³⁷⁾っていく。マッポニーの存在感と妻の話はこの方針にそぐわないために、「黄天王童」の章から削除されたのだろう。「李鳳学」の章の最初の回が完全に削除されたのも、この理由によると思われる。「両班編」「倭変」の章のあらすじと後日談を内容とするこの回が削除されたことで、単行本における「李鳳学」の冒頭は、まったく新しい物語の始まりであるという印象を与えるものになっている⁽³⁸⁾。

七 考証の結果と思われる修正

洪命憲は「林巨正」を「朝鮮情調で一貫した作品」にするという方針を立てて、小説内の各所に伝統的な慣習や風俗をおりこんだ。当然のことながら、彼はそうした場面を描くためにさまざまな文献を読んで研究したであろうし、書いたあとでミスに気づいた場合には、単行本を出すにあたってその部分を訂正したはずである。そう

いうケースと思われる箇所がいくつか見られた。

まず、「ジャガイモと玉蜀黍」が単行本で「粟」に代えられていることが挙げられる。「林巨正」における「ジャガイモと玉蜀黍」の描かれ方には、これまで地理学と民俗学の二つの立場から指摘がなされていた。洪命憲の故郷である忠清北道の槐山では、一九九六年から毎年「洪命憲文学祭」が開催されており、さまざまな研究者が各専門領域から見た「林巨正」に関する講演を行なっている⁽⁴⁰⁾。一九九八年の第三回講演会で、地理学の楊普景氏が、白頭山の近くでジャガイモと玉蜀黍を食べる場面があるのは考証不足であるとの指摘を行ない⁽⁴¹⁾、二〇〇五年の第十回講演会では、民俗学の周永河氏が朝鮮の食文化研究の立場から本格的にこの問題に言及した。

周永河氏は、ジャガイモが朝鮮半島に伝播したのが十九世紀であることは洪命憲も読んだはずの文献に書かれているのに、どうして彼がこのような間違いを犯したかに疑問を呈し、「朝鮮情調の樹立」のためにジャガイモを採り入れたと判断するしかないだろうと述べている⁽⁴²⁾。また林巨正の時代にすでに広く普及していた玉蜀黍については、逆に、小説中で白頭山でしか現われていないことに注目し、植民地時代に極貧層の食料であった玉蜀黍は、富裕な両班出身の洪命憲にとって食べ物の中に入っておらず、彼には玉蜀黍は山間地方でのみ消費する食料であるというイメージがあったのではないかと推測している⁽⁴³⁾。

第一期に連載された「皮匠編」には、師匠の瓶亥大師といっしょに白頭山に行った巨正が、人里はなれた虚頂嶺で娘と息子と三人で暮らしている逃亡婢の家に泊まる場面があり、そのときに出されるのがジャガイモと玉蜀黍である⁽⁴⁴⁾。四季節社本ではジャガイモと玉蜀黍が出てくるのはこの場面だけだが、新聞に連載されたときは実はこのほかに「義兄弟編」の「朴ユボギ」の章に三回出てきていた。エギオンマがユボギに巨正の妻を紹介しながら、彼女の一家は白頭山の火田で玉蜀黍とジャガイモ(감랭이감자)を植えて暮らしていたと話す場面⁽⁴⁵⁾、ユボギが身の上話のなかで、孟山の山奥で大病を患って足が萎えてしまい、ジャガイモ(감자入개)で腹を満たしては

【林巨正】執筆第二期に見られる、ゆれ、について(波田野)

日がな一日何もせずに生きていたと語る場面⁽⁴⁶⁾、そしてユボギが崔將軍の妻にされた娘と結ばれたあと逃げる相談をしながら、孟山の山奥でジャガイモ(감자)でも食べて暮らそうかと言う場面である⁽⁴⁷⁾。洪命憲はあとで自分の間違いに気づいたのだろう。単行本では粟(서곡)、粟飯(조밥/조밥)に直してある。一方、「皮匠編」は単行本にならなかつたので修正されず、四季節社からそのままの形で刊行されてしまったのである。なお、ほかの食事の場面を見ると、極貧層でも平地の場合は「飯」(밥)を食べている⁽⁴⁸⁾。洪命憲が玉蜀黍に対して山間地の食料というイメージを持つていたという周永河氏の指摘は当たっているようである。

つぎに、清溪川の橋の名前が修正されているのも考証の結果と思われる。妓生ソフンの家で老人亭⁽⁴⁹⁾の閑良たちと喧嘩して恥をかいた韓温は巨正に意趣返しを頼み、ある晩二人はソフンの家へ乗り込む。南小門の韓温の家から馬廐橋に出て、川沿いに孝橋、把子橋、水標橋まで歩いて長通橋に出るといふ道筋が、単行本では、永豊橋の下手に出てから新橋、水標橋と川辺沿いに歩いて長通橋に出る道筋に変わっている⁽⁵⁰⁾。作者がソウルの古地図を調べて、古い名前に換えたものと思われる⁽⁵¹⁾。

この後二人が到着した妓生房で、酒に関する記述が変わっていることも注目される。巨正と韓温がソフンの家に着いて門を叩くと童妓が出てきて、「閑良たちが―引用者)酒を持ち込んで飲んでいらつしやいます」と言う。二人が部屋に入ると中央には酒膳が置かれており、大将格の若者が「酒膳を片付けさせろ」とソフンに命じて、部屋にはたちまち殺気が漂う。巨正が怪力で閑良たちを懲らしめて追い出したあと、上機嫌の韓温は酒を届けてくれるところはないかソフンに尋ね、閑良たちも酒は自分で準備したという答えに、自分の屋敷から酒膳を届けさせるよう仲間に命じる⁽⁵⁴⁾。

単行本では、童妓が先の言葉ごと消えてしまい、部屋の真ん中に置かれているのは青銅の火炉である。若者がソフンに命じる言葉は「長鼓を片付けろ」⁽⁵⁵⁾に変わり、韓温はソフンに相談せずに酒膳の手配をしている。要するに、妓生房で飲む酒の出処がうやむやにされているのである。

巨正に意趣返しを頼んだとき、韓温は喧嘩のいきさつを話しながら、妓生と遊ぶ客にはそれなりの「妓生房の格式」が必要であることを説明している⁽⁵⁶⁾。朝鮮王朝時代の末、妓生房には様々なしきたりがあつて、それをふまえた粋な受け答えができなければ、たとえ金を払っても一人前の遊び客としては受け入れてもらえなかつた⁽⁵⁷⁾。ソフンの妓生房で韓温が閑良たちと時調によつて粋を競う場面からは、洪命憲が妓生房でのならわしを研究したことが窺われる。考証の過程で、客が外で酒を買つて妓生房に持ちこむ習慣が十六世紀にあつたかどうか疑わしいことに気づいた作者が、あとでその部分を消したのである。

朝鮮情調の正確さを期すために、洪命憲は手に入るだけの資料を調べたはずである。いま見たような修正からは、洪命憲がつねに考証の努力を続けていたことが窺われる。とはいえ、彼が描いた「林巨正」の世界が十六世紀の朝鮮をそのまま表しているとはみなすわけにいかない。周永河氏は、十六世紀に唐辛子はまだ伝来していなかったのにコチュジャンが登場したり、十八世紀以前は塩漬けや醤油漬けだったキムチがその説明なしに頻繁に出てくることを挙げて、「林巨正」はけつして風俗史の再構成ではなく、洪命憲が「朝鮮的」とみなしたもので作り上げた「小説」であると述べている⁽⁵⁸⁾。そして現在「朝鮮的」だと思われているものの中に実際には「二十世紀に作り出された啓蒙的な近代性の表象」が混じっている可能性をあげて、洪命憲たち二十世紀初めの植民地知識人たちが追及した「朝鮮的なもの」が、「林巨正」が「歴史小説」であるという理由で後世の人々に「想像上の朝鮮」として記憶され、さらに現代においてそれを共通項として作り出されたイメージが疑念なく受け入れられてしまう危険性を指摘している⁽⁵⁹⁾。

周永河氏の言うとおり、「林巨正」は「小説」である。もし、そこに描かれた事物が十六世紀そのままのものであつたなら、そもそも歴史小説「林巨正」は「小説」として成り立たなかつただろう。姜玲珠氏は、歴史小説

とは過去の時代を今日の風俗と言語に翻訳することによってその時代を現代の読者に近づけるものであって、そのためにルカーチの言う「不可欠なアナクロニズム」が必要であることを述べている。⁽⁶⁰⁾ 現代と完全に切り離された理解不能な言葉や風習にあふれた小説は、読者の興味を引くことはできない。たとえ考証上は「時代錯誤」であつても読者がイメージを持つことができるものに翻訳することが、歴史小説ではある程度必要なのである。⁽⁶¹⁾

洪命憲がキムチを修正していないことも「不可欠なアナクロニズム」の一つとみなしてよいだろう。ジャガイモと玉蜀黍を修正した洪命憲が唐辛子の伝来時期を知らなかったとは考えられない。その彼がキムチについては修正しなかったのは、周永河氏の推察通り、彼がそれを「朝鮮情調」に不可欠とみなしたからだと思われる。彼には、考証にとらわれすぎて「林巨正」を「小説」でないものにする意図はなかったわけである。このことは「林巨正」に描かれた酒店についても言える。妓生房での酒の出し方には正確を期して修正した洪命憲だが、一般の酒店については自分の時代のイメージで描いているようであり、修正もしていない。⁽⁶²⁾ 人々が酒を飲む店は小説においてはどうしても必要な場所だったからであろう。

八 登場人物に関わる修正

筆者が「林巨正」研究を始めたきっかけは、巨正の人格が途中から変わっていることに疑問を抱いたことだ。前に述べた⁽⁶³⁾。前半では清冽な革命家のような印象で筆者を魅了した巨正が、「義兄弟編」に入ってからがらりと変わって粗暴で家父長的になってしまふことへの違和感と拒否感のために、筆者はじつは「義兄弟編」が好きになれなかった。ところが今回丹念にテキストを読んでいるうちに、前の記憶が薄れたこともあつてか、ようやく巨正の人間像に対する拒否感がなくなってきた。そして思ったのは、作者はまさに筆者のような読み方をされることを恐れて前半三編を単行本にしなかったのではないかということだった。最初の三編を読んでから「義兄

弟編」を読むと、前半との不連続性のために後半では読書への没頭が妨害されてしまう。北朝鮮で一九八五年に「林巨正」を刊行したとき、洪命憲の孫の洪錫中は前半部も入れることを考えたが、「前半と後半の文学的様相があまりにかけ離れており、修正程度に手をいれたところで、とうてい一つの小説として統合させることはできないことが分かった⁽⁶⁴⁾」ために断念したという。筆者自身の経験からしても、最初の三編は「別巻」か「外伝」として後ろに回した方がよいのではないかと思う。

こんなわけで、登場人物の性格や人間関係をあらわす記述をチェックするさいには、巨正の変貌に関わる修正がないかどうか注意したが、特に該当しそうなものは見当たらなかった。たとえば彼の性格がもつともストレートに説明されているのは、巨正が靑石洞の大將に推戴されてまもなくの下記の文章だが、そこは以下のように推蔽されている。

「そもそも巨正は、育ちの賤しきという点では、師匠である楊周八や友人である徐起と同じであるが、楊周八のような道徳もなく、徐起のような学問(공부)もないために、人の侮りや蔑視を笑い飛ばすことも、泰然として受け流すこともできず、いつしか性格ばかりが奇怪になって、矛盾する性向が多かつた。人の首を刎ねること大根を抜くがごとくでありながら、蜘蛛の巣にかかつた蝶を見過(다시)しにできず、(두지)吳計(고)보지)吳計(고)田畑の穀物を平気で(작란)으로(예사로)踏みこむくせに、溝に落ちた飯一粒を惜しみ、機嫌のよいときには氣長だが、氣が急くとなると(조급)하네(조급)하네) 枯葉に火がついたように激しかった」⁽⁶⁵⁾

作者が推蔽に氣を使ったことは窺われるが、字句の修正のみであつて内容にはかわらない。このほか、濟州島で李鳳学と再会した巨正が飲み明かしながら心のうちを吐露するくだりにも修正は見られなかった。⁽⁶⁶⁾ 洪命憲は「義兄弟編」を書き始めるときに巨正の人格を決定して、その後は変更しなかったことがわかる。

人間同士の関係はどうか。義弟たちに対してはもともと兄として上に位置していた巨正だが、大將になるとそ

の上下関係はさらに厳しくなる。この点を強調するためと思われる修正が、待遇法の一部に見られた。連載当時、巨正はオジュに対して最初から常に「ハ」を付けていたが、それを単行本で修正して、最初のころは「ハ」を付けている。同様に、大將になったあとでもユボギと鳳学に対して「ハ」を付けていた巨正が、単行本では、後半で彼らに時おり「ハ」を付けて使うように修正した。これらは、義兄弟たちとの上下関係を際立たせるためではないかと思われる。

女性関係については、「閑良への仕返しが終わってから——引用者）巨正は韓温の世話で数人の女性に夜伽をさせるようになっていたので、以前のように一人で夜を過ごすことはなかった」という巨正の女性関係の乱れを表わす部分が削除されている。また、三人の妻の一人である朴氏に関する小さな修正がある。朴氏は巨正が都にきて最初に娶った妻である。尹元衡の使用人から借金をかたに言い寄られていた彼女を救うさいに、巨正は行きがかり上、十二人も人間を殺した。だが、そのあと刑曹判書元繼俊の娘を得ると、育ちの違いを考えて巨正は元氏の家具調度品を「朴氏のものよりつばに整え（単行本で削除）、使用人も与える。一流の料理を出す元氏の家で食事するようになった巨正が朴氏のもとで夜を過ごす回数が減ったのを、作者は、巨正が朴氏に冷たくなったのでなくて「朴氏が時おり巨正を嫌がった」のだと連載で説明していた。それを単行本では、「朴氏に婦人病が生じ、巨正が寝にくるのを嫌がる気配が時おり見えた」と朴氏の拒否をやわらげる表現に直している。のちにノバミの口から語られる流産の話と考え合わせて、このとき朴氏は妊娠中だったことが推測される。おそらく朴氏の心中には何か葛藤があったのだろう。巨正の妻たちはみな幸福ではないが、雲龍を除いてその心理は直接描かれていない。拉致されて妻となった刑曹判書の娘元氏の悲しみと諦念を推測させる記述がいくつか見られるのみである。朴氏に関するこの修正から推して、作者は巨正と女たちとの葛藤には踏み込まず、読者の想像力にゆだねるつもりだったようである。

つぎに、巨正をはじめ登場人物の残虐性が薄められる傾向が見られた。たとえば巨正が自分たちを密告した隣家の崔一家を襲ったとき、連載本では、巨正は自分の手で夫婦と老母と子供たちを惨殺しているが、単行本では直接手を下すのは夫婦だけで、他の家族は火をつけた家から出ずに死ぬという間接的な殺人になっている。また都に押送される李鳳学を助けるために天王童とマッポニーが禁府都事一行を襲う場面では、連載時には残酷に首を切られた捕盗部将が、単行本では蹴られて谷底に落ちただけで生還している。

李鳳学の赤子の存在が修正によって小さくなっているのも、残虐性を弱める傾向と通じるように思われる。巨正のために船を出したことが露見した臨津江別將李鳳学が、兵曹判書李潤慶（単行本では右議政李浚慶）の助力を求めに都に行こうとして捕盗軍使に足止めされたとき、「お付きの老女」が来て、桂香が「動胎」（胎児が動いて流産の恐れがある病気）になったと知らせる。この部分で単行本では「役人」に変わり、「動胎」が「腹痛」に変わっている。そして「お付きの老女」は、乳は出るかと尋ねた李鳳学に向かって「たっぷり出ていますよ」と妊婦の代りに答える場面とともに姿を消している。このほかに、鳳学が愛おしそうに母子を見つめる姿や、二人に風を当てないために遠い方の戸から出て行く心遣いも削除され、全体として親子の印象が弱められている。青石洞の連中が禁府都事一行を襲ったのは自分たちを救うためですかと聞く桂香に、鳳学が苦々しそくに、「俺たちを救いに来てくれたのか、死地に追いやるために来たのか、俺には分からん」と言って、赤子が乳を飲む様子をじっと覗き込んだ」というくだりの傍線部分は、単行本に「と答えた」に修正されている。巨正らの善意は、李潤慶兄弟の力で助かるはずだった鳳学一家を火賊の道に引きずり込む結果を生み、このあと李鳳学は一種の諦念とともに生きていくことになる。赤子の存在感を弱めることによって、作者は鳳学親子が巻き込まれていく運命の残酷さを弱めたかったのではないかと思われる。

注目されるのは、李鳳学の「義賊性」とも言うべきものの修正である。都に戻る元平安監司李樑（単行本では

金明胤)の行列が臨津江を渡るとき、臨津別將の鳳学は彼から不手際を責められて恥をかく。そのあと現われた天王童から、行列が青石洞を通過したときに仲間内の意見が合わなくて變わなかつたことを聞いた鳳学が、變わなかつたことを責めて、「あの沢山の進上品がなんだか知っているか。あれは全部平安道の人民の膏血なんだぞ」と言い、それに対して天王童が「悪辣だな、俺たちよりむしろ」と答えるやりとりが、単行本では削除されている⁽⁸⁵⁾。作者は、義賊のようなこの言葉が李鳳学に似合わないと考えたのだろう。巨正が濟州島にいる李鳳学を訪ねて世の中の不正を愚痴つたときに、鳳学は同調しなかつた⁽⁸⁶⁾。乙卯倭変での戦功によって李潤慶に取り立てられ、その弟で朝廷の高官である李浚慶の後ろ盾を得ている彼には、悪政を憎む心はあっても義賊のような考え方はない。彼がこのあと青石洞に入るのは、自分を押送する禁府都事一行を青石洞の仲間が襲つたために後戻りできなくなつたからである。作者は新聞連載のときにはこの言葉を鳳学に言わせてみたものの、彼の人物像に適合しないと考えてこれを削除し、「なぜ襲わなかつた」という部分だけ、さつき自分に恥をかかせた元監司への個人的な恨みの言葉として残したのだと思われる。

このほかに目に付いたのは、「青石洞」の章で登場するノバミに関する修正である。彼の語る女性遍歴に、女を強奪したことはないという真つ赤な嘘が加えられているのは、彼の厚顔さを強調しようという意図からであろう⁽⁸⁸⁾。氣を失つた両班婦人を犯すときに「私はいま花を見た蝶、水を見た雁のようで、このまま通り過ぎることはできません。お許しを」という滑稽な台詞を挿入したのは、喜劇的な要素を強めようとしてのことだろう。ノバミの人物設定について作者はかなり苦勞したらしく、このほかにも修正の跡が多くある⁽⁸⁹⁾。

九 「朝鮮王朝実録」に関わる修正

先回の論文で筆者は以下のように推論した。「義兄弟編」を執筆中に「実録」と出会った洪命憲は、とりあえ

ず「義兄弟編」はそのまま書きつづけて、「火賊編」の「青石洞」の章以降から本格的に「実録」を作品に取り入れ、単行本にするにあたって、先に書いた「義兄弟編」を後で書いた「火賊編」の内容に合わせて修正したのだ。この推論の根拠として筆者は、「李鳳学」の章で鳳学が倭寇撃退遠征中に会つた「湖南兵馬節度使」を「湖南兵馬節度使南致勤(傍点筆者)」にした例や、「徐霖」の章で「李欽禮が青石洞の一味を捕縛した話」と「李億根事件」を挿入した例をあげた⁽⁹¹⁾。

このほかの例として、今回あらたに、「結義」の章で巨正が楊州の獄を破つて家族を救出したあとの、「巨正を早く逮捕せよと王が直接命を下し」という部分が削除されていることに気づいた。これは前述の李欽禮および李億根関連の記述が挿入されている箇所のお前である。推測するに、洪命憲は「義兄弟編」を書いているとき、「実録」に見られる「破獄」の記述から楊州破獄や安城破獄の想を得たものの、単行本で本格的に「実録」の事件を挿入したい、「王が直接逮捕を命じた」という表現が不正確であることを気にして削除したのではないだろうか。この時点ではまだ王が直接林巨正の逮捕を命じてはいないからだ⁽⁹²⁾。

「結義」の章にあった「ケドチ」のエピソードが完全に削除されているのも、「事録」に関わる修正である。「ケドチ」とは巡警使李思曾が巨正に仕立てた「加都致」のことだと思われる。「林巨正」の連載は李思曾が黄海道に派遣されたところで中断しているが、「実録」によれば、その後李思曾は巨正を逮捕したと称して都に押送し、その人物が徐霖との対面で巨正の兄「加都致」であることが判明したという⁽⁹⁵⁾。洪命憲はこの事件を取り入れる構想を立てていたらしく、その布石として「青石洞」の章で呉哥の名前が「ケドチ」であることを韓温の父に語らせている⁽⁹⁶⁾。だが彼は「結義」の章を連載していたころには、「加都致」の役を郭ヌントニイに与えるつもりだつたようだ。郭ヌントニイとは安城の破獄を手伝い、巨正と仲間を親戚の家に匿った盗賊である。捜索にきた捕盗軍官に姓名を尋ねられた彼がとっさに手下の名前「ケドチ」を名乗り、そこに出てきた巨正が軍官と軍士七、八

名を切り殺し、家ごと死体を焼いて村を出るという話が、単行本では丸々削除されている。洪命憲は「靑石洞」の連載中に構想を変更し、吳哥にこの役をふりあてることにして、ヌントニイの存在を小さくしたのである。ヌントニイはこのあと巨正の護衛兵となるが、大きな役割は与えられていない。こうしてみると第二期の連載時には「ケドチ」が二回出てきたわけであるが、一五六〇年が二度あったときと同様、これに気づいた読者はほとんどいなかったのではないか。

以上のような例は、「実録」を取り入れる姿勢がまだ定まらないころの試行錯誤の痕跡といえる。方針が決定した「火賊編」の「靑石洞」になると、「実録」を材源とした記述は、後述する一カ所をのぞいて変わっていない。「靑石洞」で本格的に「実録」の内容を取り入れた最初の記述は、大將になった巨正に野望を吹き込みながら徐霖が言う、この春に黄海監司が交代したのも、武官が松都都事になるようになったのも、みな自分たちのせいだという言葉である。⁽⁹⁷⁾ 朝廷が黄海道の盜賊を危険視して対策を考えているという「実録」の記述を「林巨正」に取り込むことで、洪命憲は巨正たちの存在を史実の枠組みの中に組み込んだのである。徐霖が巨正に根拠地を作るよう勧めて候補としてあげる地名や、両班たちの名前も、やはり「実録」から取られている。

「靑石洞」の章で描かれるのは都で遊ぶ巨正の姿である。巨正に三人の妻がいたという「実録」の記述に想を⁽⁹⁸⁾ えて、洪命憲は舞台を地方から都に移してこれまでとは違った朝鮮情調を描こうとしたのである。しかしながら、「林巨正」を歴史の枠組みにはめ込もうとする姿勢の方は先に進むにつれてあいまいになっていく。妻雲龍との壮絶な夫婦喧嘩や義弟たちに暴君のごとく振舞う巨正の姿は、小世界に君臨するようになった人間の変貌の一つの典型でもあって興味深い。そうした人間悲劇を描くなら必ずしも「実録」を材源とする歴史小説である必要はない。作者もそれを感じたことが、連載中断にいたる原因の一つとなったのではないだろうか。病氣も重なって連載のペースは次第に遅くなっていく。三人目の妻金氏の話の途中に長期休載が二回あり、結局「靑石洞」

の終了とともに連載は中断した。

「靑石洞」の章での「実録」に関わる唯一の修正は、冒頭の文章の挿入である。⁽⁹⁹⁾ 連載三時、「火賊編」の冒頭は巨正が靑石洞の大將に選ばれる場面であった。ところが単行本では、その前に作者が顔を出して、十六世紀の朝鮮で黄海道を盜賊の巢窟にならしめていた制度上の二つの問題点、すなわち人民の負担能力をはるかに超えた「貢物」と、平安道の辺境警備「西道赴防」の弊害について詳しく説明し、最後に黄海道の現状を述べている。前半の「貢物」と「西道赴防」の弊害に関する部分は「栗谷全書」から取ったもので、⁽¹⁰⁰⁾ そのあとの「明火賊の輩が夜中に火をともして村に入ってくるのはいつものことであり、白昼、邑に入って獄門⁽¹⁰¹⁾を破り、官邸を取り囲んで官の下人を殺し官物を奪っていくことすら時折あった」という部分が「実録」を材源としている。⁽¹⁰²⁾

この挿入は、単行本を出すころの洪命憲が「靑石洞」の章に感じたと思われる不満を示唆する。十六世紀の人々はどうのような政治制度のもとで生き、どんな矛盾が人々を苦しめていたのかなど、洪命憲は「林巨正」に朝鮮情調だけでなく歴史的な知識も付与して、その歴史の枠組みの中で生きる人間をより客観的に描きたかったのだろう。それで単行本刊行のさいに、この部分を挿入したのである。この挿入を行なった第三期には洪命憲は歴史に深い関心を抱いて研究していたので、「林巨正」の創作方針もそれにつれて変化したのだと推測される。

「靑石洞」の最後で、洪命憲は「実録」に名前だけ出ている金山という人物を登場させ、⁽¹⁰³⁾ 年齢と出生年を名乗らせることで小説内時間を一五六〇年に設定しなおしてから連載を中断した。二年後に再開した「林巨正」「火賊編」「松岳山」の章の小説内時間は一五六〇年五月の端午節である。第二期中断から第三期の連載がはじまるまでの二年間は、「靑石洞」とは違った形で「実録」を材源とした歴史小説を書くための準備期間であったと考えられる。

十 その他

最後に、このほかに目に付いた修正について簡単に記しておく。洪命憲は全文にわたって丹念な推敲を行なった。単純ミスの訂正は、たとえばユボギの故郷「康翎」を「璽津」にしてしまったり、妓生「ソフン」の名を一時李鳳学の妻の名である「桂香」に取り違えていたのを訂正した例があるが、さほど多くはない。後者は病気による長期休載の前後なので集中力が低下していたのではないかと思われる。語の置き換えの例は無数にあった。面白い修正例として、「걱정이업스십니까」を「태평이십니까」に直したり、「걱정」を「근심」「염려」「탈」などの語に置き換えてあるのが時おり見られた。巨正の名前「걱정」が頻出するので混乱を避けるためである。頻出を避けるための変更には「왜(倭)」も挙げられる。倭寇の場面ではこの字があまりにも多いためだろう、「왜」や「왜변」を「난리」、「왜선」を「적선」、「왜」を「왜적」や「도적」などに修正した例がいくつも見られた。

洪命憲は推敲にあたって、文章を引き締め、朝鮮語らしいリズムをもった文章にしようと努力したようである。文章の長さについては、「나제는 별일이 없었고 밤에 원씨가」や「애 걸하는데 걱정이가」を「애 걸하였다. 걱정이가」のように長い文章を短く簡潔にする例もあったが、全体としては二文や三文を一文にして長くする傾向の方が多く見られた。たとえば、「돌석이가 젊은장교의성명을물었 다 황천왕동이란 돌석이 귀에 생소한성명이다 돌석이가 고개를흔들며」が「돌석이가 젊은장교의성명을물어 보니 황천왕동이 라는데 성명이 생소하여 돌석이는 고개를흔들며」のような例である。推敲の跡をたどりながら、朝鮮語の文章と語彙の美しさを追求する作者の努力が感じとられ、「林巨正」は朝鮮語の豊かな鉱脈」と賞賛した李克魯の言葉が思い出された。

おわりに

以上、洪命憲の小説「林巨正」の第二期新聞連載テキストと単行本テキストを対照して気づいたいくつかの点を報告した。この対照作業を思い立ったきっかけである小説内時間の不整合については、残念ながらその理由を突き止めることができなかったが、単行本では消されてしまった、新聞連載中の作者の「ゆれ」を感じ取ることができた。今後は、ゆれがおさまったあとの第三期のテキストを分析したいと考えている。

註

- (1) 「林巨正」は一九二八年十一月二十一日から「朝鮮日報」で連載され、何度か中断したあと雑誌「朝光」一九四〇年十月号掲載をもって未完のまま終了した。なお「林巨正」の詳しい書誌については拙論「林巨正」の「不連続性」と「未完性」について、「朝鮮学報」第九十五輯、二〇〇五、「三」「林巨正」の書誌参照
- (2) 「林巨正」全四巻、朝鮮日報社、一九三九〜四〇年
- 「林巨正」全六巻、乙酉文化社、一九四八年
- (3) 「림거정」全六巻、国立出版社(ピョンヤン)、一九五四〜五年
- (4) 「林巨正」全九巻、四季節出版社、一九八五年／「林巨正」全十巻、一九九一年
- 「림거정」全四巻、文芸出版社(ピョンヤン)、一九八二〜五年
- (5) 註(一)拙論
- (6) この点については二〇〇四年十月に九州大学で行なわれた第五回朝鮮学会での報告で言及し、「謎」であると述べた。(http://www.nicol.ac.jp/~hatan/profile/kyosei/2004japanese.doc)
- (7) 註(一)拙論、「五」(5)「再度の構想」参照
- (8) 「朝鮮日報」一九三三年四月二十六日
- (9) 吉一三(一九三三年六月十五日)／「林巨正」一

三頁。これは一九三三年六月十五日に『朝鮮日報』に掲載された「김막봉의」の章の一三三で、四季節出版社十巻本の第五巻の一三三頁であることを表わす。

本論文の註では「朝鮮日報」連載時の章名と章番号を以下のように略して示し、必要と思われる場合のみテキストも引用する。

박윤보의 朴、곽오주 郭、김막봉의 吉、황친왕동이의 黃、배돌석의 裴、리봉학의 李、서림 徐、결의 結、청석골 靑。連載時の章番号は非常に乱れているので、念のために新聞掲載日付を括弧に入れて付け、その部分が単行本のどの頁にあるかも示す。ただし煩雑を避けるために四季節出版社十巻本のみで示して、朝鮮日報社本と乙酉文化社本は使用しない。

(10) 徐三二二(一九三四年五月二日)「황가가 올때에만에 귀양이 풀려서 이담보름께 소인의 집을 차지앗습기에」／『林巨正6』一三五頁(ただし単行本では「結義」の章である)「황가가 이담에 귀양이 풀려서 소인의 집을 찾아왔습기에」

(11) たとえば巨正を密告した隣の崔一家との隣付き合いの期間を数年(수년)から一年あまり(해포)に修正したのは、数年前は巨正の家に住んでいた天王童の顔を崔の妻が知らなかったからである。徐二二〇(一九三四年三月二

十七日)／『林巨正6』八九頁(「結義」の章)

(12) 徐一一三(一九三四年二月二十日)／『林巨正6』三二、三頁

(13) 註(一)拙論、一二二頁

(14) たとえば「李鳳学」の章で、尹元衡の官職を左議政から領中樞府事に、李浚慶を単なる議政府右贊成から議政府右贊成兼兵曹判書へと訂正してある。李一一三(一九三三年十二月二十八日)／『林巨正5』三六五頁。なお、「火賊編」に入ると尹元衡の官職は最初から正しく記されている。作者が途中で誤りに気付いたためだろう。官職ではないが、金明胤を光平君としてあったのを名前に直した例などもある。徐一一二(一九三四年二月四日)／『林巨正6』八頁。「実録」一五六〇年二月四日に「以尹元衡爲瑞原府院君、金明胤爲光平君」の記述があり、この時(連載本では一五五九年、単行本では一五五七年。なお連載本では沈連源の一周忌によって年が特定されたが、単行本では時間調整のために削除された)金明胤はまだ光平君でなかったことが分かる。

(15) 註(一)拙論に時間変更にもなる官職変更の代表例を二つ挙げた(一二二頁)が、特に李潤慶・浚慶兄弟については煩雑なまでに修正してある。

(16) ただし、金郊察訪姜侶だけは符合しない。結義のあと

(21) 朴(一)(一九三二年十二月十三日)／『林巨正4』三八頁

(22) 朴二一八(一九三三年十二月二十三日)／『林巨正4』六三頁。ただしユボギはこの日盗賊申不出に出会ったためソウルには到着していない。

(23) 裴三一四(一九三三年十一月十日)／『林巨正5』二八八頁

(24) 結三一二(一九三四年七月二十四日)／『林巨正6』二六三頁

(25) 結三一四(一九三四年七月二十六日)／『林巨正6』二六九頁

(26) 『林巨正10』一六八〜一七七頁

(27) 朴四一五、六(一九三三年二十六、二十七日)二十七日掲載分は「朝鮮日報」マイクロフィルムに入っていないため未確認。

(28) 朴四一一、一二(一九三三年二月七、八日)

(29) 吉一一二(一九三三年六月二十五日)／『林巨正5』三六頁。連載のときは百五十里であった。この数字変更に根拠があるかどうかは不明である。「義兄弟編」の途中から挿絵を描いた具本埜は、洪命憲に挨拶に行ったとき、壁に地図が貼ってあったことを回想している(林榮澤・姜玲珠、「崔丞喜명회와 林巨正」의 연구자료, 四季節出版社

(18) たとえば息子洪起文が父を語った「아들로서 본 아버지」にある「우리 아버지의 읽으신 책이 얼마나 된다든지 기억력이 어찌시다든지 하는 등은 새삼스러이 말할 것도 없다」という文章など。『洪起文朝鮮文化論選集』、現代實學社、一九九七年

(19) 『三千里』一九三四年七月号、二五〇頁／林榮澤・姜玲珠、「崔丞喜명회 연구」, 創作과批評社、一九九九、二八九頁。以下「研究」と略記する。

(20) 一例として、尹元衡の使用人が友人の未亡人に貸し付けた生活費分が木綿四十疋(一疋は五十反)から五疋になっっているのは、女性二人の三年間の生活費としては多すぎると思ったからだろう。青三二〇(一九三四年十二月十三日)／『林巨正7』一二九頁

『林巨正』執筆第二期に見られる「ゆれ」について(波田野)

社、一九九六、二五八頁。以下「資料」と略記する。洪命憲は「林巨正」執筆当時、朝鮮古地図のほかに専門家用の5万分の1地図も参考にしていたという。「研究」二八九頁

(30) 黄一三(一九三三年八月三日)「속지법률학지」속지법이 무엇이냐」「귀신이 땅을 줄음 집어 준다며」

(31) 「林巨正5」一一六頁。「걸음 잘 걷는 단 말은 많이 들었지만, 아이구」하고 손가는 말발도 못 맺고 허물 내들었다」なお連載本ではこの台詞は開城でマッポニイと行き会って同行していた孫哥が天王童の早足を見て発した言葉になっている。

(32) 黄一四(一九三三年八月二十四日)

(33) 「林巨正5」一二五頁。「한민가서 다녀오기로 하였다」

(34) 黄一五(一九三三年八月八日)

(35) 「朝鮮日報」一九三二年一月三〇日／「資料」三六頁

(36) 「洪命憲・薛貞植対談記」、「新世代」一九四八年五月

／「資料」二二三頁。なお「林巨正」とクープリンの作品との関わりについては、姜玲珠の論文「홍명희의 임꺽정」과 쿠프리인의 「절투아」がある。「홍일문학의 선구, 벽초 홍명희와 임꺽정」, 四季節出版社, 二〇〇五 註(40)參照

(37) 姜玲珠は、「義兄弟編」「火賊編」では章中の各節までがそれぞれ完結性をもってしていると指摘している。「研究」二八六頁

(38) 李一一(一九三三年十一月十八日)

(39) ただし、この修正の理由としては次の可能性も排除できない。一つは、このあと「両班編」を完結させて刊行する予定なので中断部分の梗概を述べる必要がないこと、もう一つは、逆に、洪命憲は単行本を出す当初から前半三部は出さないことを念頭においていたので、この部分をカットしたという可能性である。

(40) 筆者も第八回文学祭に招聘されて「東京留学時代の洪命憲」と題する講演を行なった。二〇〇五年の第十回文学祭を記念して四季節社は講演内容を学術論文集「統一文学の先駆、碧初洪命憲と「林巨正」として出版した。

(41) 「林巨正」의 地理學的考察」, 前掲書, 三三〇頁

(42) 「小説「林巨正」의 朝鮮飲食描寫에 대한 研究」, 同上, 二四一頁

(43) 同上, 二四三頁

(44) 皮匠編八(一九二九年六月七日)／「林巨正2」二九三頁

(45) 朴一一五(一九三三年十二月五日)／「林巨正4」二〇頁

(46) 朴一一八(一九三三年十二月九日)／「林巨正4」二九頁

(47) 朴四一一〇(一九三三年二月一日)／「林巨正4」一四二頁

(48) ユボギが泊まった申不出の家で老母が作って出すのは「밥」であるが、連載では「밥한사발 간장한종지」であったのが単行本で「밥한사발, 장찌개 한그릇뿐」に変更されている。朴一一十(一九三三年十二月二十七日)／「林巨正4」七二頁

(49) 一八九四年の東学農民戦争時に日本と朝鮮政府の会談が行なわれたことで有名な老人亭は、十九世紀初めに翼宗妃の父豊恩府院君趙萬永が建てた亭であり、巨正の時代にはなかった。考証不足か。

(50) 青三一四(一九三四年十二月三日)／「林巨正7」一一一頁

(51) 許英桓「定都六〇〇年서울地圖」(汎友社、一九九四)に収められている朝鮮時代のソウル地図を見ると、永豊橋と新橋の名前が見えるのは最初一枚(一六頁にある一七五〇年代の都城図筆者本)だけで、他はほとんどが馬橋、孝橋、把子橋である。

(52) 青三一四(一九三四年十二月三日)「약주를 사다잡수심니다」

【林巨正】執筆第二期に見られる、ゆれについて(波田野)

(53) 青三一五(一九三四年十二月四日)「술상고만치우라게」

(54) 青三一七(一九三四年十二月八日)「술한삼시켜술수업겠나」하고 물었다「시켜술사람이업세요 약가한냥을도 자기네가 가서시켜왔습니다」

(55) 「林巨正7」一一二頁「장구고만치우게」

(56) 「林巨正7」一〇七頁

(57) 「ソウル城下に漢江は流れる——朝鮮風俗史夜話」林鍾國、平凡社、一九八七年、「十二夜の花——妓生部屋の仕来り」參照

(58) 註(42)、周永河氏論文、二四七〜九頁

(59) 同上、二五五〜六頁

(60) 姜玲珠「홍명희와 역사소설」임꺽정」、「資料」三七七頁

(61) 「明らかに、まさしく言葉の問題においてこそ、必要な時代錯誤」の問題が決定的な役割を演じる。(中略)カルタゴやルネッサンスについて、またイギリスの中世やロマ帝国について、今日の読者に語るのは、今日の作家だからである。すでにこのことから、歴史小説の一般的な言葉として古語を使うことは無用な技巧として退けられなければならない(中略)重要なことは、今日の読者に過去の時代を身近にもたらすことである」(ルカーチ著「作家3」

白水社、一九八六年、三二三〜四頁)

なお、キムチと「不可欠なアナクロニズム」との関わりについては、姜玲珠氏とのメールのやりとりから示唆を得たことを明らかにしておく。姜玲珠氏には本論文執筆中、メールでいろいろと相談に乗っていただき、大いに励まされた。この場を借りてお礼を申し上げる。

ところで、「不可欠なアナクロニズム」を示唆する具体的な修正例はないかと探してみたが、筆者の力量不足のため見つからなかった。「소주방」(小説では「焼酒房」という漢字になっているが標準国語大辞典によると「焼厨房」で宮中の厨房という意味)から「주라간」(王の食事を作る所)への修正(李一一二)／『林巨正5』三九九頁)と「평조」(平調「伝統音楽の首座」から「시조」への修正(青三一一)／『林巨正7』一〇七頁)は、あまり使われない用語をよく知られた言葉に換えてあることから注目したが、前者は直前に주라という語が使われているために直した可能性があり、後者はすぐあとにし조という語が使われているうえ、「平時調」の誤記の可能性もあり、該当しないようである。

(62) たとえば鳳山でユボギと黄天王童が入る「미역주막」(『林巨正5』一一九頁)、「巢窟」の章でノバミが巨正の手下を連れて入る南小門近くの「용수달린집」(『林巨正8』

二三四頁)など。

(63) 註(1)拙論、九一頁

(64) 홍석중「림적정4」,「후기」三五四頁、文芸出版社(ピョンヤン)、一九八五年

(65) 青一一七(一九三四年九月二十一日)／『林巨正7』三三頁

(66) 李三一一〇(一九三四年一月二十四日)／『林巨正5』三九三頁

(67) 郭三一一七(一九三三年六月二十七日)／『林巨正4』二七四〜六頁 巨正が青石洞に遊びにきてオジュと初めて会い、皆で狩に出かけた場面。

(68) 青五一一八(一九三五年十月二十二日)／『林巨正7』二七〇〜一頁 巨正の妻雲龍とともに都の韓温の屋敷に来た林ユボギと李鳳学が、巨正と喧嘩腰で話している場面。ただし、大将になったばかりの巨正が「十八般武艺」の内容を知りたくて李鳳学を呼び出したときには、連載本で「너」だったのを単行本で「자네」に直している。この時点ではまだ하계を使わせておきたかったのか。青一一七

(一九三四年九月二十一日)／『林巨正7』二三頁

(69) 青三一一九(一九三四年十二月十一日)／『林巨正7』二二四頁

(70) 青四一八(一九三四年十二月二十八日)／『林巨正7』

一四五頁 連載本では十四人であった。

(71) 「박씨의 천보담 흥통하게 잔만하얏다」この前後四行が単行本では削除されている。青四一二六(一九三五年二月一日)／『林巨正7』一九二頁

(72) 「박씨가 걱정이물 간간 괴로워하얏다」青四一二六(一九三五年二月一日)

(73) 「박씨가 속에 냉이 생겨서 걱정이의 자리 오는 것을 괴로워하는 눈치가 간간 보이얏다」(『林巨正7』一九三頁)

(74) 青五一一〇(一九三五年十月十日)／『林巨正7』二四六頁

(75) たとえば巨正から隣家の寡婦金氏との関係を知らされ、その強弁を聞いた元氏は涙を流すが、「しかしこの涙は巨正の言葉が流させたのではなく、自分の悲しみがあふれ出したものであった」(青四一三七)(一九三五年八月一日)／『林巨正7』二二〇、一頁

(76) 徐三一一九(一九三四年四月十五日)／『林巨正6』二二七頁

(77) 徐四一一一(一九三四年五月十四日)「부장은 목이 다떨어지지 아니한 머리를 땅에 끌고 쓰러진채 다시 일어나지 못하얏다」／『林巨正6』一五九頁

(78) 徐四一四(一九三四年五月五日)「안에서 상처할미가 나와서」안으서님이 놀라서 동태가 되섯습니다」하고 말

【林巨正】執筆第二期に見られる「ゆれ」について(波田野)

하얏」／『林巨正6』一四三頁

(79) 「林巨正6」一四三頁「관속 하나가 앞에 와서 안으서남께서 갑자기 복룡이 나서서 정신을 못 차리신답니다」하고 고아얏」

(80) 徐四一五(一九三四年五月六日)「첫이 도섯소이다」하고 대신대답하얏다」

(81) 同上

(82) 徐四一一三(一九三四年五月十六日)「우리를 구해 주러왔는지 죽을고루 몰아너키러 왔는지 나는 모르겠네」하고 대답하얏뒤 첫네애 첫머는 저울넘짓이 드러다보아얏다」

(83) 「林巨正6」一六三頁「하고 대답하얏다」

(84) たとえば「巢窟」の章で巨正が典獄を破るという無謀な計画を立てたときの李鳳学の心理。「李鳳学は巨正の計画が枯れ草を背負って火に入り込むように無謀なことだと知っていたが、どうせいつかは来るのが早まるだけのことだと考えて、泰然としていた。しかし、愛妾桂香といっしょに座っている幼い息子チェロンを見るときは、思わず溜息が漏れるのであった」(『林巨正8』二九二頁)

(85) 徐四一六(一九三四年五月二十日)「그여러바리 붕몰이 무엇인지 알얏다 그것이 죄다 평안도 백성의 고혈이라네」【날도둑놈이 우리더러 되련】／『林巨正6』一四七頁

(86) 李三一〇(一九三四年一月二十四日)／『林巨正5』三九三頁「형님, 그런 속상하는 이야기는 그만두구 다른 이야기나 합시다」

(87) 同上／『林巨正6』一四七頁「왜가만두었나?」

(88) 青二一八(一九三四年十月十九日)／『林巨正7』六三、四頁

(89) 青二一四(一九三四年十月二十八日)／『林巨正7』七四頁「내가 지금 꽃본 나비 같구 물본 기리가 같아서 그저 갈 수가 없소, 용서하우」

(90) 一番長い修正としては、力比へのエピソードを完全削除しているが、これは冗漫さを取り除くためではないかと思われる。青二一九、一〇(一九三四年十月二十一、二十四日)

(91) 註(一)拙論、一二五〜七頁

(92) 徐三一二(実は四一一)(一九三四年四月七日)「각 정이는 속히 체포하라고 상감이 친히 분부를 나리서서」／『林巨正6』一三三頁(単行本では「結義」だが連載當時は「徐霖」の章だった)

(93) 破獄の想を与えたと推定されるのは、以下の三公議啓である。洪命憲はこの記事を単行本で「靑石洞」の最初に挿入している。明宗十四年三月十三日「乙酉、三公、領府事、兵曹、刑曹同議啓曰、黃海道賊勢兇獷、非徒搶殺人物、

至於白晝之中、圍抱官門、而射其守令之羅卒、打破獄門、而奪其囚繫之黨類」巨正の名が「実録」に最初に登場するのは、このあとの二十七日の李億根事件に関する記述であり、王が巨正逮捕を直接命じるのは、翌年十一月の徐霖逮捕の直後である。なお、本稿執筆にあたり朝鮮王朝実録のテキストは国史編纂委員会の「朝鮮王朝実録」のサイトで検索し(<http://silok.history.go.kr/main/main.jsp>)「李朝実録」(学習院大学東洋文化研究所)で確認した。

(94) 개도치
(95) 明宗十六年一月三日「甲子、黃海道巡警使李思會、江原道巡警使金世濟復命、以捕捉賊魁林巨叱正入啓、〔其實非林巨叱正、乃賊人加都致也。思會嘗以刑杖取供、誣服指爲巨叱正。〕傳曰、得捕大賊、予用嘉焉 義禁府啓曰、拿致徐林、〔曠賊也〕與林巨叱正面質、則徐林云、非林巨叱正、乃巨叱正之兄加都致、亦大黨也。眞爲難辨、拿其妻子、一處憑閱何如。傳曰、如啓」(傍線引用者)

(96) 青三一四(一九三四年十一月十九日)／『林巨正7』九〇頁
(97) 青一四(一九三四年九月十八日)「느진됨에항해잡사가갈리구송도도가새로나지안렀습니까사람조흔진황해잡사가대간(臺諫)의탄핵(彈劾)을받았구갈리깃두우리네때문이고남행차리루나려오던송도도사를전에

엄시호반이해은것두우리네때문이니(後略)」／『林巨正7』一五頁

(98) 明宗十四年三月二十五日「丁酉、上御朝講、憲府啓曰、黃海道獷悍大黨、厥類繁滋、爲患益甚。所謂腹心之疾、不可緩治。本道觀察使愼希復、以其父母墳與田庄、在於平山、慮其報復、不爲號令節制、督令捕捉。請速遞差、別爲擇差、以期設策督捕、盡殲無遺。答曰、如啓」

明宗十四年三月二十七日「己亥、上御朝講、領議政尙震、左議政安珪、右議政李浚慶、領中樞府事尹元衡同議(因朝講金鎧所啓、命議于大臣、故同議如此)啓曰、開城府都事、以武臣擇遣、上教至當」その他、李億根事件に関する記述など。

(99) 江原道の伊川、平安道の陽徳・孟山・成川など。

青一一五(一九三四年九月十九日)「제가생각한데를말씀하면강원도땅에는이천(伊川)의광복산(廣福山)이나주음동(周音洞)이조쿠요함정도땅에는안변(安邊)황룡산속이나덕원(德源)근처가조쿠요병안도땅에는양덕(陽徳)의양암(陽岩)과명산(孟山)의두무산(豆無山)이조흔데성천(成天)회산(檜山)제물성(提物城)가튼데두몹니다」／『林巨正7』一八頁(単行本では陽徳の陽岩が古樹徳に、豆無山が鐵瓮城に変えられている)

明宗十五年十月二十二日「甲寅、兵曹判書權敏等啓曰、

『林巨正』執筆第二期に見られる、ゆれ、について(波田野)

黃海道獷悍之賊、措捕之策、三公已啓矣。近聞賊勢、日漸熾張、至稱官號、出入列邑、橫肆無忌、或有守令、不知而接待者云、至爲駭愕。賊徒聞其本道追捕之聲、則例必投入於平安道成川・陽徳・孟山、江原道伊川之境、而未聞兩道監司、兵使措置捕捉之策、至爲非矣」(傍線引用者)

(100) 平山府使蔣孝節、金郊察訪姜侶(註(16)参照)、右辺捕盜大將李夢麟、刑曹判書元繼俊など。
(101) 明宗十五年十一月二十四日「丙戌、捕盜大將金舜卓啓曰、側聞黃海道曠賊林巨叱正同黨徐林者、變名嚴加伊、來接于崇禮門外、伺而捕之、推其所犯。其言曰、去九月初五日、其黨聚于長水院、欲持弓矢、斧斤、乘昏入城、打破典獄署獄門、出其魁林巨叱正之妻、〔前日長通坊掩捕之時、林巨叱正出走、只獲其妻三人〕」(傍線引用者)

(102) 『林巨正7』五〇八頁
(103) 『栗谷先生全書』一、卷五、疏節三「陳海西民弊疏」
「前略」道内民瘼。大者有二。一曰。西塞遠戍之苦。二曰。進上煩重之弊也。(後略)「矢沢康祐氏は論文「林巨正の反乱とその社会的背景」の中で、林巨正反乱の社会的背景として、栗谷の指摘したこの二大民瘼を挙げている(『旗田巍先生古希記念朝鮮歴史論集上巻』五六一頁、龍溪書舎、一九七九)。洪命憲が材源としたのが栗谷全書であると気がついたのでこの論文のおかけである。

- (104) 註(93)に同じ「至於白晝之中、圍抱官門、而射其守令之羅卒、打破獄門、而奪其囚繫之黨類」
- (105) 青六一一四(一九三五年十二月十八日)／【林巨正7】三四四頁
明宗十六年十二月二十日「乙亥、傳曰、平壤庶尹洪淵、捕捉大黨金山。准給加資、陞授安州牧使」
- (106) 李三一七(一九三三年一月十八日)／【林巨正5】三八五頁
- (107) 青四一二九、青五一五、六、一七、一八／【林巨正7】一九八頁、二三一、二三八、二四二頁、その他
- (108) 青四一三〇(一九三五年七月二十四日)／【林巨正7】二〇〇頁
- (109) 朴(二)(一九三三年十二月十三日)／【林巨正4】三七頁
- (110) 朴四一九(一九三三年二月十三日)／【林巨正4】

- 一六七頁
- (111) 郭三一三(一九三三年五月二十日)／【林巨正】二六六頁
- (112) 襄一一二三(왜남↓단리, 전장)李一一六(왜변↓단리, 왜선↓적선, 왜↓왜적)李一一三、五(왜적↓도적, 왜선↓적선)その他
- (113) 青二一五(一九三四年十月十三日)／【林巨正7】五六頁
- 青四一三六(一九三五年七月三十一日)／【林巨正7】一九頁
- (114) 襄一一一(一九三三年十月一日)／【林巨正5】二一三頁
- (115) 【朝鮮日報】一九三七年十二月八日／【資料】二五五頁

(県立新潟女子短期大学教授)